

第16回 日本篆刻家協会役員展

出品目録

会期: 令和6年 6月29日(土) ～ 8月25日(日)

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
1	井谷 五雲 イ タニ ゴ ウン	一日秋風一日疏 不入画師譜 知白雲妙	—	金冬心詩	常任顧問
2	山下 方亭 ヤマ シタ ホウ テイ	用拙存吾道	杜甫の詩の一節	杜甫詩	常任顧問
3	尾崎 蒼石 オ ザキ ソウ セキ	至徳 康寧 剛録皆應	—	—	会長
4	真鍋 井蛙 マ ナベ セイ ア	遊目騁懷	思うがままに見わたしておもいを解き放つてのべること	「蘭亭序」	理事長
5	喜多 芳邑 キ タ ホウ ユウ	寺前佳興 東風有意 春雨湿衣 半庭酌酒	—	伊達政宗詩	副理事長
6	黒田 玉洲 クロ ダ ギョクシュウ	風塵三尺劍 社稷一戎衣	戦乱の中で三尺の剣をふるって天下を統一 軍服を身につけて大唐帝国を安泰にした	杜甫詩「重経昭陵」	副理事長
7	酒居 石荘 サカ イ セキ ソウ	絶四 母意 母必 母固 母我	意・必・固・我の四を絶つ / 人の心をはかり / 無理おしをせず / 執着をせず / 我を張らない	論語 子罕	副理事長
8	小 朴 圃 ショウ ボク ホ	窗明几淨 堅心毅力 不憚勞苦 尤且无日不讀書看畫	窓は明るく机は清らか / かたい心とつよい力 / 労苦をいとわぬ / 書(本)を読まず、画を看ない日は無い	黄賓虹書簡	副理事長
9	多田 龍淵 タ ダ リュウエン	拗取銅坑 江南春贈 塵沙劫	拗取す銅坑 / 江南の春に贈られし / 塵沙の劫 拗取銅坑玉一枝 江南春贈隴頭時 到来已是塵沙劫 賦得瑤華欲寄誰	「王士禛」	顧問
10	中島 春緑 ナカ シマ シュンロク	大吉羊	非常にめでたいこと	莊子・人間世	顧問
11	草田 翠苑 クサ ダ スイ エン	龍飛鳳舞	—	—	代表理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
12	ユウ ヘ サイ 黄 平 齋	龍 燕雀安知鴻鵠志 甲辰 太虚無雲清鏡無痕 三百枯 聞聲悟道 吉祥 善惡不二邪正一如	一 / 一 / 令和6年の干支 / 大空に雲ひとつなく、鏡にも一つの痕(きず)もない / 一 / 声を聴いて微妙な意味を理解し道を“悟”る / めでたい印 / 善悪は二つのものではなく、邪正もまた本来は同一のものである	一 / 一 / 一 / 「禪林語句鈔」 一 / 「論語」 一 / 「禪林語句鈔」	代表理事
13	タ ナカ シュウブン 田 中 修 文	登樓清嘯	やぐらに登り、清らかな声で詩歌をうたう	『晉書』劉琨傳	代表理事
14	フル ミゾ ユウ ケイ 古 溝 幽 畦	得深藏 嘉樂斯登 鳴求以詠 寿如金石 佳辰好	—	—	代表理事
15	ワタ ナベ ワ キン 渡 邊 和 琴	緑葉青葱 傍石栽	—	董其昌詩	代表理事
16	イ サ ジ ショウウン 伊 佐 治 祥 雲	徐行踏断 流水聲 縦觀寫出 飛禽跡	流水聲を止め、飛禽の跡を寫し出す 水になり切り鳥になり切る妙悟の真境	碧岩集(禪林句集)	名誉理事
17	オク ダ シン セイ 奥 田 晨 生	山静似太古	山は静まり返って太古のようだ 山静似太古 日長如小年 餘花猶可醉 好鳥不妨眠 世味門常掩 時光簾已便 夢中頻得句 拈筆又忘筌	北宋の詩人 唐庚詩 睡眠	名誉理事
18	タ ナカ リョクスイ 田 中 緑 翠	竜得水 竜生九子 亀龍寿 鱗介尊神竜 竜鳴虎吼	—	—	名誉理事
19	ツツミ ハク ユウ 堤 白 遊	蒼龍得水 老虎山靠	—	—	名誉理事
20	ヤス ダ ショウセキ 保 田 昌 石	黄葉孤邨 賣酒家	黄葉孤村酒を売る店 青山兩岸尋詩路 黄葉孤村賣酒家	王時憲詩「疎林秋晚」	名誉理事
21	イゴ ガ ドウ 井 後 雅 堂	柔弱勝剛強 卵翼之恩 温良恭儉讓 蓮華生游泥	柔らかくて弱いものの方が固いものに勝る / 親鳥は翼で卵を温め難となっても片時も離れず育てる。子はその恩を忘れない / 人と接する時は温和で優しく穏やかに相手を敬って慎ましくする / 蓮は泥に染まらず美しく花を咲かせる。そして空に向かって真っすぐ伸びる	「老子 一三六」 「春秋左氏伝」 「論語」学而 「維摩經」	常務理事
22	イシ ハラ ホウ ギョク 石 原 豊 玉	筆墨蕭颯 如秋蓬	筆墨もののさびし / 秋の枯れた蓬のごとし	王士禛詩中句	常務理事
23	イズ タ トウ カ 出 田 塘 葭	華裾織翠 金環厭轡	—	—	常務理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
24	オオ ムラ セツリョウ 大村 雪陵	法輪常轉 慶歸法胤	—	—	常務理事
25	カジ カワ ク ミ コ 梶川 久美子	舍利弗 目犍連 大迦葉 須菩提 富樓那 迦旃延 阿那律 優波離 羅睺羅 阿難陀	釈迦十大弟子	—	常務理事
26	キタ ダ セイ ライ 北田 成磊	磊々室 知足 威風堂々	(作者の室号) / みずからの分をわきまえて、それ以上のものを求めないこと / 威厳があつてりっぱであるさま	— / 「老子」 / —	常務理事
27	クマ モト セキ セイ 熊本 夕生	高臺魚鳥	(家には)高いうてなや魚や鳥(の見るべきものがある) 多高僧隠士佛廬勝地家有園林珍花奇石曲迢高臺魚鳥流連不覺 日暮藤蘿翳景	陸紹珩の語	常務理事
28	ゴ トウ コウ タ ロウ 後藤 黄太郎	黄中内潤	才能や徳が内に充実していること。またそれを内に深くしまい込んで外に表さないこと	漢字・熟語	常務理事
29	シモ イ ヨウ キン 下井 瑤琴	棒頭有眼 雙鯉顯祥 加持感應 權勢貴頭 翊鳳為林	盲打ちはしない / 吉語 / 信心が神仏に通じる / 権力や威勢がある / しょうほういりん	仏語 / 禅語 / 吉語 菜根譚 / —	常務理事
30	セキ ショウ ヒ 関 青飛	従心所欲 勇往邁進 了了地 以友輔仁	こころほつする所にしたがう / 困難をものともしないで突進むこと / 玲瓏透明なるを言う / 友によって仁徳を達成する助けとする	論語 / 俗言 禅語 / 論語	常務理事
31	ト デ キウ ロ 戸出 九廬	秉燭夜游 羣季俊秀 皆為恵連 独慚康樂	明かりをともして夜にも遊ぶ / 多くの年少の者たちで才能のある者 / みな謝恵連のよう(に詩が上手)である / 康樂に恥じ入るばかりである	春夜宴桃李園序	常務理事
32	ナカ ハヤシ チ カゲ 中林 千影	東方高 玉轉濕絲	東方高し(夜が明けたこと) 玉転は縄を湿らせる(井戸のろくろがつるべの縄をぬらす)	李賀詩	常務理事
33	ナカ ムラ ヨウ シュウ 中村 葉舟	坤厚戴物 徳合無彊 含弘光大 品物咸享	地はひろく厚い徳をもってあらゆる物のその上にのせる / 天の盛大なるかぎりない徳を配合する / 包容力の豊かな広大な徳 / 万物はすすすくのびて盛んに生長する	易経	常務理事
34	ハ セ ガ ワ キ カイ 長谷川 帰海	不易流行	—	—	常務理事
35	ハ セ ガ ワ タク セキ 長谷川 拓石	人生如寄 多憂何為 今我不樂 歲月如馳	人の一生は仮住まいにも似て / 憂いがいくら多くとも、どうしようもないことだ / 今この時を楽しまなければ / 歲月はあっという間に過ぎ去ってしまう 高山有崖 林木有枝 憂来無方 人莫之知 人生如寄 多憂何為 今我不樂 歲月如馳	曹丕の詩 善哉行 四言詩中第二段落	常務理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
36	ヒガシ オ コウ ガク 東 尾 高 岳	治本於(于)農 務茲稼穡 俶載南畝 我藝黍稷	農業は国を治める基本であり / 五穀を植えて収穫するまで 仕事に励む / 春になってはじめて南の方の田地に出て耕 作にとりかかり / きびやあわを蒔き植える	千字文	常務理事
37	マツ モト マサ シ 松 本 雅 至	無固必 不羈之志 思舊賦 鄰人有吹笛者 莊子注 響笛 (押脚印)	固必すること無し。(嵇康や呂安のような超俗の持ち主とは異なり、出处進退については固必するところがなかった。変人ではない。) / 何ものにも束縛されないで生きるのだとする精神。 / 向秀がある寒い日の夕暮れに昔の住まいを通りすぎた際、どこからともなく笛の音が聞こえてきたため、嵇康・呂安と過した旧事を思い出し、感傷に堪えず作った賦 / (嵇康の旧宅の)隣人に笛を吹く者がいて… / これまで「莊子」に注をつけた者は数十人いたが、その根本的主旨を極めることができた者はいなかった。向秀は既存の注にとらわれない解釈をして、「莊子」のすぐれた境地を見事に分析し大いにその玄なる哲学を広めた。 / 向秀は「思旧賦」の作者として有名で、その賦の核である`笛の音が響き、悲運に倒れた友人達のことを懐かしむ'ということで、印を刻し、作品に添えた。	「向秀別伝」 「晋書」 「文選」 「文選(思旧賦)」 「世説新譜・文学」	常務理事
38	ヨシ エ スイ コウ 吉 江 翠 光	游必有方	—	—	常務理事
39	ヨシ ダ ガ フウ 吉 田 雅 風	仁人心也 義人路也	仁は人の心の自然であり、 義は人の踏み行くべき正当な道である	「孟子」	常務理事
40	ア ダチ リュウセン 足 立 瑠 泉	爲樂當及時 愚者愛惜費 難可與等期 何不秉燭遊	楽しむときはそれなりの好機がある / 愚かなものはわずかなむだごとを惜しむ / いつまでもいきながらることなど出来ない / どうして明りを手にして共に遊ばないのか	「文選」生年不滿百(題) 無名氏	参事
41	ウ オ ザキ ヘキ ホウ 宇 於 崎 碧 峯	万事無心一釣竿 三公不換此江山 平成誤識劉文叔 惹起虚名満世間	すべてのことに無欲で釣をしている / 三公の地位もこの山河には代えられない / むかし誤って後漢の光武帝と知り合 い / 虚名ばかりを浮き立たせて世間に知られてしまった	漢詩 釣台 南宋・戴復古(七言絶句)	参事
42	タ ダ ミノ リ 多 田 稔 里	衆鳥高飛盡 孤雲獨去閑	衆鳥高く飛んで尽き / 孤雲獨り去って閑なり	李白	参事
43	ホン ゴウ シ コウ 本 郷 紫 香	栽花樂太平	花咲く草木を栽培し風流に耽って太平を楽しむ	古事	参事
44	アサ ノ コウ ガイ 浅 野 江 涯	褚河南書 清遠蕭散 微雜隸體	褚河南の書は / 清遠蕭散にして / 微しく隸体を雜う 超俗的でさわやかに、ものしずか。唐の褚遂良の書について評した語	宋・蘇軾「書唐氏六家書後」	理事
45	アゼ ハラ ショウ カ 畔 原 小 華	莫為之前 雖美不彰	先導となってくれる人がいなければ どれほどすぐれた才能を持っても世に知られない	文章軌範	理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
46	ア ベ ショウ ロ 阿 部 祥 廬	教之 既富矣 何加焉	これを教えん / 町の人々多く富ませたら / 何をしたものでしょう	論語 子路十三の九録	理事
47	イ シ カワ ム ガイ 石 川 無 外	崩雲蟬翼 顛委勢峻	—	—	理事
48	イ ナ ガキ カ セン 稲 垣 華 扇	好字不離口	「好」の褒言葉が絶えることがない	袁枚詩	理事
49	イ バ ショウラン 射 場 少 藍	繚亂櫻花 春似畫	桜の花がさきほこっている / 春の画のようだ 堤塘草色一番新 行看田園農事振 繚乱桜花春以画 夕日落所発霞頻	自詠詩	理事
50	イ マ ムラ トウ ホ 今 村 董 圃	合将天眼 讓蘇黃	合に天眼を將って / 蘇黄に讓るべし	丁敬(論印絶句) 其六	理事
51	エン ドウ ベイ シ ジン 遠 藤 米 子 人	鷄唱三聲 天欲明 自捲蓬窗 看暁星	けいしょう せい てん あ 鷄唱三聲 / 天 明けんと欲す みづか ほうそう ひら ぎょうせい み 自ら蓬窗を捲いて / 暁星を見る	(宋)華岳「田家」	理事
52	オ オ タ ケイ スイ 大 田 桂 翠	採菊東籬下 悠然見南山	—	陶淵明詩	理事
53	オ カ ザキ ギ セキ 岡 崎 戯 石	花謝樹無影 亂瀑界蒼崖松風吹雨急石廊虚無人高寒不能立 持己不可不巖明與人不可不和氣 圖書獨娛	迷いの花おち明暗の影なし。妄念のない形容 / 背景には乱れ落ちる滝が青い断崖にくっきりと白く松風はざっと雨を吹きつけている。石の渡り廊下はひっそりとして人影もない、たたずむこともできないほど高寒な風光だ / 自己にはきびしく律しなければならぬが人と交わるには和気を以ってせねばならぬ / ひとり書画を楽しむ	碧巖録にみゆ 呉偉業の句 陳繼儒 眞山民	理事
54	オ カ ダ ケイ シュウ 岡 田 桂 舟	明道若昧	真に明らかな道は暗いように見える	老子第41章	理事
55	オ ガミ ギョクカン 小 上 玉 菡	神亀雖壽 猶有竟時 騰蛇乗霧 終爲土灰 烈士暮年 不但在天 養怡之福 可得永年	神亀は千年単位で生きるが/それでも終わりがある/騰蛇は霧に乗り飛び回るが/土灰となって終わる/烈士は人生の暮れにも(若々しい心を保っている)/(満ち欠けがあるのは)天に数多ある星だけではない/この中原で心身を養う幸福は/永えに続くべし	曹操 歩出夏門行 「亀壽雖」	理事
56	オ ガワ ヒ セキ 小 川 匪 石	萬歳 萬歳萬萬歳	天子の寿を祝して用いられた語句	—	理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
57	岸村 爽風 キシ ムラ ソウ フウ	對酒當歌 幽思難忘 我有嘉賓 鼓瑟吹笙 山不厭高 海不厭深	—	曹操詩「短歌行」	理事
58	木村 容庸 キ ムラ ヨウ ヨウ	魚將化龍	魚將 ^{まさ} に龍 ^か と化す	—	理事
59	嵯峨 洛山 サ ガ ラク ザン	會者定離 回向（象形印） 大慈 有頂天 俱會一處 生者必滅 禱 アリガトウ 虚実混交	—	—	理事
60	坂本 舜華 サカ モト シュン カ	俶載南畝 播厥百穀	(広大な田んぼに種を厳選し)南の田を耕し多くの穀物の種をまく	詩經	理事
61	晋 鷗 シン オウ	樂此不疲 食金石力	—	—	理事
62	巽 聖石 タツミ ショウセキ	即慎行処 神光四發 遺囑不亂	行ないを慎しむこと / 精神の靈光が四方に輝く / 立派に遺言して乱れない	言志録	理事
63	田原 呉山 タハラ ゴザン	其應如響 大義滅親 長途御二龍 智勇兼備 湛盧之劍 たいぎしんをめつす ちよとにはにりゆうをぎよせよ ちゆうけんび たんろのけん	— / 大きな道義を行なうためには、肉親をも犠牲にする / 遠くに行くには2匹の龍に乗っていけ / 知恵と勇気をかけそなえている / 春秋時代、呉の君主闔閭 ^{こうりよ} が持っていたとされる宝剣の名	— 左伝 隠公四年 劉絳伝 史記 闔閭内伝	理事
64	寺田 知了 テラ ダ チ リョウ	風雨同舟 遊魚之聲 夙夜在公 和光同塵	困難や苦勞と一緒に経験すること / 魚の泳ぐ音 / 朝早くまだ夜の明けきらないうちから公事に務めること / 仏が衆生を救うため、自分の本来の知徳の光を隠し、けがれた俗世に身を現すこと	「孫氏」九地 不詳 「詩經」召南・采芣 「老子」道德經	理事
65	中本 管城 ナカ モト カン ジョウ	向晚意不適 驅車登古原 夕陽無限好 只是近黄昏	日が暮れようとするのに心は満たされない/そこで車で楽遊原に登ってみた/すると夕陽はこの上なく美しい/がしかし黄昏がすぐそこに来ているのだ。	楽遊原 李商隱詩句	理事
66	名倉 克彦 ナ グラ カツ ヒコ	游雲驚龍 如沔急流 繫風捕影	能書の形容 / 容易に進みがたい / とりとめないこと	晉書 / 蘇東坡の言 谷永の語	理事
67	庭田 露舟 ニワ タ ロ シュウ	今日登樓又送歸 楚客臨江 今日登樓 そきやくこうえのぞんで	きょう ^{たかどの} 樓に登り又歸るを送る / 南方の旅人は長江に臨んで / きょう ^{たかどの} 樓に登り	(中唐)劉禹錫 ^{りゅううしやく}	理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
68	ハタ マ セイ ロ 畑 間 青 露	催人脱袴 著新衣	人に早く袴を脱いで新しい衣を着るように催促して「脱却布袴」と鳴いている	黄魯直詩「戲和答禽語」	理事
69	ハナ フサ コウ ケイ 花 房 浩 佳	已爲陳跡	つかの間のうちに過去のものとなる死生観を表現した	蘭亭序	理事
70	ハヤ カワ チョウフン 早 川 聴 芬	曉風残月 西風急	行盡江南數十程 曉風残月入華清 朝元閣上西風急 都入長楊作雨聲	杜常「華清宮」	理事
71	バン ドウ コウ ショウ 坂 東 香 璋	福至心靈 鍾鼎古器	幸福に至るにはまず心と魂からはじめる / しょうていこき	—	理事
72	フク タニ カ コウ 福 谷 華 紅	絶壑層雲 許盪胸	深くきりたった谷に重なっている雲 かくのごとく胸をうごかす	朱子詩	理事
73	フル セ ショウセキ 古 瀬 章 石	我獨清 隱惡揚善 四門遊觀	私ひとりが清らかである / 他人の悪いところは言わずに善いところを広めること / 釈迦が出家を決意するきっかけとなった象徴	楚辞 / 中庸 修行本起經	理事
74	フル ノ エン アン 古 野 燕 安	大日如来 曼荼羅 止觀座主 忽恵書札 仁王經等 莫責莫責也 十日払晨将参入 法前謹空	万物の慈母であると共に宇宙の中心であり、宇宙の真理そのものである / マンダラは中心・心髄を意味する「マンダ」と所有を意味する / 心を乱さず正しい知恵を起こし、仏道を完成する実践一座の上首 / おもいがけなくお手紙を頂く / 仁王經等など/どうぞあしからずおとがめにならないようお願いします / 十日の朝早くに発してお伺いしたい / 空海が書面して申し上げる次第です	アブギダサンスクリット 密教の經典 空海「風信帖」	理事
75	マ ケイ セン 馬 景 泉	獨歩天下(梵字) 甲辰三種 無心是道 與古爲新 大吉祥豊貴昌 龍年六十又五 君子以厚德戴物 遠山近皆有情 海納百川 有容乃大 上善若水 大愛無疆 将進酒	一 / 十二支 / 無心こそがそのまま道であるという意味 / 一 / 吉語 / 一 / 君子は人徳を高く持ち義務を成し遂げる / 近くを流れる川の水も、遠くの山のたたずまいも、みなそれぞれ情持っている / 海は無数の川を受け入れるからこそあれだけの大きさを持っているという意味 / 最高境界の善行就像水的品性一样澤被万物而不争名利 / 指博大的愛是無限的這種大愛沒有國界 / 一 /	後漢書・逸民傳・戴良 十二支 / 一 / 一 吉語 / 一 周易 / 松原泰道句 四字熟語 上善若水老子句 李白	理事
76	マツ モト スイ ジョ 松 本 翠 女	悠然策藜杖 歸向桃花源	悠然として ^{あかぎ} 藜の杖を策き / 歸りて桃花源に向かわん	王維詩 口号又示裴迪詩中句	理事
77	マツ モト セイ エン 松 本 清 苑	順理則裕 從欲惟危	理に順えば則ち裕なり / 欲に従えば惟れ危し	程頤「動箴」	理事

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
78	マツ モト ソウ フウ 松 本 艸 風	曙嶺移雲 耽讀翫市	曙の嶺に雲がかかってくる様子 書を市中に求めて読みふけること	万葉集 / 千文字	理事
79	ヤマ ネ ヨウ エン 山 根 容 園	鶴飛千尺雪 龍起一潭氷	鶴は千尺も積もった雪原を蹴破って大空に飛び立つ / 龍は一面に氷の張り詰めた池を突き破って空に昇る / (彼らはどんな困難をも突き破って自分に備わった力を存分に発揮する)	禅語	理事
80	ヤマ モト ジュ ホウ 山 本 寿 法	蘆葉風涼 江波月寒	蘆葉風涼しく / 江波月寒し 武帝との問答の後、小舟に乗って揚子江を渡っていく達磨大師	禅語	理事
81	ヨコ イ セイ レン 横 井 青 蓮	禮以節人 樂以發和 書以道事 詩以達意	礼を以て人に対する / 音楽は心を和らげる / 書を以て事を説く / 詩を以て意を伝える	説苑	理事
82	アオ キ ユウ ザン 青 木 雄 山	篤信好学 無道則隠	深く信じて学問を好み / 道のないときは隠れる	論語泰伯八	参与
83	アキ ヤマ ショウ カ 秋 山 捷 華	吾儕雖老且窮 道理貫心肝	ごさいろう か きゅう いえど 吾儕老且つ窮と雖も / 道理心肝を貫く	—	参与
84	カワ ク ボ アキラ 川 久 保 明	明窓浄机 筆硯紙墨	—	—	参与
85	タ ダ ガク ユウ 多 田 學 友	和爲貴 仁者壽 游于藝 逝者如斯夫 居處恭執事敬 寬則得衆	人と睦まじく親しみ合うことが最も貴いことである / 仁の道に達した人は長寿である / 六藝を学んで心をゆったりさせる / 往くものは過ぎ、来るものは続き暫らく停ることなし / 身を處し位に居り、聊かも驕傲ならざる是れ恭、事を行ふや必ず粗略なきを期する是れ敬 / 心を広くし、常々寛大の処置を取らば、衆人の歸服をば得べし	「論語」 学而 / 雍也 / 述而 子罕 / 子路 / 陽貨	参与
86	ツ ダ シュウ ホウ 津 田 秀 鳳	似大山榴 映小山 繁中能薄 艷中閑	丘を映し火山のように / 建物の中では薄くて華やかです	杜牧「山石榴」	参与
87	ナガ ノ ソウ スイ 永 野 草 翠	漸々人聲絶	ぜんぜん 漸々として人声絶ゆ 沈沈更鼓急 漸漸人声絶 吹燈窓更明 月照一天雪 沈々として更鼓急に 漸漸として人声絶ゆ 燈を吹いて窓更に明かに 月は照らす一天の雪	袁牧 十二月十五夜 五言絶句	参与
88	フル タ マモル 古 田 衛	不忘遠	疎遠になった人のことを忘れない	「孟子」	参与

第16回 日本篆刻家協会役員展

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
89	カネ コ セイ ハ 金子 静巴	自我来黄州 年々欲惜春 两月秋蕭瑟 海棠花	我れ黄州に來たりしより / 年々、春を惜しまんと欲す / 両月、秋蕭瑟たり / 海棠の花	黄州寒食詩卷	評議員
90	コ マツ ゴ ガク 小松 五岳	白日依山盡黄河入海流欲窮千里目更上一層楼	輝く太陽が山に寄り添って沈んでいき、黄河は海に向って流れている。千里先まで見渡したいと思い、更に1つ上の階へと登った。	王之渙「登鶴鵲楼」 かんじやくろう	評議員
91	サエ グサ リュウセン 三枝 龍泉	清風徐來 舉酒屬客	清風おもむろに來る / 酒を挙げて客に属する	蘇東坡「赤壁賦」	評議員
特	バイ ジョ テキ 梅 舒適	大方無隅 老而彌篤	—	老子「道德經」 曾先之「十八史略」	特別展観